翻刻

市立米沢図書館所蔵「霊前勧進詩歌」

石黒志保

【解題】

当資料は、市立米沢図書館所蔵の木村家文書一九九に収蔵されているものであり、また同館のデジタルライブラリーにおいて全文画像公開もされている。

この詩歌が出来した契機は、資料中の詞書にあるように、寛延三年（一七五〇）に藩士の佐藤長兵衛直長の家で北野天満（祭神菅原道真）の式日に和歌会が行われたことである。その後、関口六蔵（満雅、東嶺）の勧めもあり、米沢の吟友から北野天満へ奉納する詩歌を蒐集し、宝暦七年（一七五七）に一軸にまとめた。その後も詩歌は追加され、現在の形態になったのは明和三年（一七六六）であったという①。

『米沢市史』には米沢の寛永・宝暦年間（一七四八～一七六四）の文化の様子を知る上で重要な資料であることが記され、また『上杉鷹山―改革への道―』に一部翻刻されているが②、全文の翻刻は未だなされておらず、今ここに翻刻を試みるものである。

この詩歌が編まれた時期である、寛延三年から明和三年の十六年間は、第八代藩主上杉重定の藩政下である。宝暦年間にはかつてないほどの藩財政が悪化した上に、飢饉が頻発し、特に宝暦五年（一七五五）は「宝五の大飢饉」といわれ、大雨による洪水、川堰の決壊による甚大な被害を蒙った年であった③。その翌年、翌々年も長雨や大雨が頻発し、米沢の人口は元禄五年（一六九二）の十三万三一五九人から、宝暦十一年（一七六一）には九万九三六九人と大幅な減少に至っている。

また藩政においても混乱が見られた。宝暦十三年には藩政を専横していた森平右衛門利真（のち利直）が藁科松伯貞祐の家塾である菁莪館に集った「菁莪社中」及び竹俣当綱によって殺害される。その後は竹俣が奉行（家老）となり藩政を主導し、明和四年（一七六七）になると上杉重定の養子であった上杉治憲（鷹山）が家督を継ぎ、藩政の立て直しが図られていくが、この詩歌編纂時はその黎明期であった。

米沢の俳諧史においては、明和二年（一七六五）、美濃派の俳人安田以哉坊（一七一五～一七八〇）が来訪したことが画期となり、城下連グループが連日句会を設け、俳諧が盛んになっていった。このような時期にこの詩歌が編纂され、そこに集った人々を見ていくことは米沢の藩政史においても文化史的にも興味深いものであろう。

詠人は巻末の記載によると、「吟輩　百三十五人、諸士八十二人、女八人、僧十二人、町家十九人、郷村十二人、盲二人」、歌数は「二百七章」、蒐集されている（表参照④）。

冒頭歌には高津七郎兵衛唯恒の和歌が十五首採られているが、この高津や木村丈八高広、倉崎清吾一信、小川与総太は、先に触れた「菁莪社中」の者である。その家塾の主宰であった藁科松伯自身も漢詩と俳諧をこの詩歌に残しているが、この「菁莪社中」の面々がこの時期に名を連ねているのも注目される。

歌番号26と27の間には、寛延三年二月二十五日に、高津が和歌十五首を詠んだことを機縁として「北野神像」を仕立てることとなり、吟友が和歌十題二十五首を添え（歌番号2～26）、またそれに続けて関口六蔵と佐藤氏の求めにより各藩士がそれぞれ歌を詠んだものであることが記される。

関口六蔵は馬廻組の家柄で物頭、祐筆所筆頭を勤め上げ、上杉治憲の素読相手や夜話にも度々招かれた人物である。関口の筆としては江戸詰であったときに書写した和歌の秘伝書「てには秘伝」（市立米沢図書館林泉文庫二六六）が残っているが、米沢を代表する文人のひとりであった。

儒者では、十五歳の神保善弥（蘭室）の漢詩や、儒者の家である片山家からは片山紀兵衛一真、代次一積の親子が詠を残している。神保や片山はのちに興譲館督学や提学を勤めた人物である。また、安永二年（一七七三）に七家騒動の首謀者とされた藁科立意（立沢）の詠も載っている。藁科立沢が編んだものには漢詩集「鶴城四時歌」（市立米沢図書館所蔵）があり、上杉治憲の師である細井平洲が序文を載せている。この藩士や僧から六十四首の詠を集めた「鶴城四時歌」が出来たのは、明和七年（一七七〇）冬のことであるが、その翌年に立沢は「儒業ニ怠惰ニ付」、儒者職を除名され⑤、その翌年には七家騒動を起こし、立沢は処刑される。そして片山家がさらに重用されていく。このような背景を知る上でも、上杉治憲入部前の文化人らの交流を知る上でも、この「霊前勧進詩歌」は貴重なものであろう。

また当時の米沢俳諧において、この「霊前勧進詩歌」にその名は見えないが、米沢新田藩の二代藩主である上杉勝承（一七三五～一七八五、松嵐、素嶺）の存在も大きかったかと思われる。この詩歌には、美濃派俳人、そして米沢武門宗匠である上杉勝承から文台を譲られた高橋平左衛門（紅二、牡丹窟）、その跡を継いだ小嶋内記（唇秋）の詠は、この「霊前勧進詩歌」に見え、また武門連として藁科松伯（兎狂）や倉崎清吾（素涼坊）の名も見える（図参照）⑥。

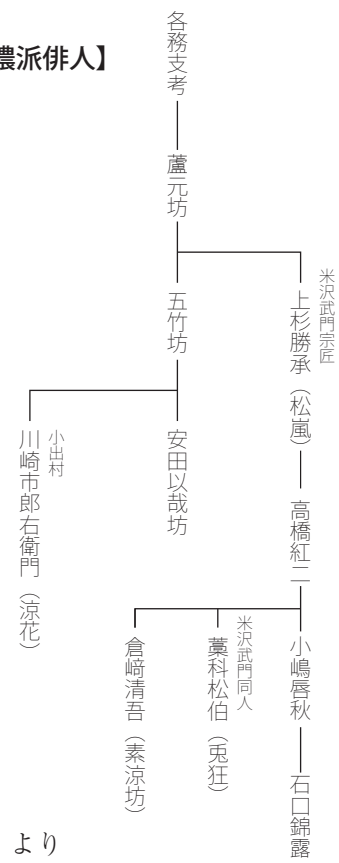
加えて女流歌人の舟山雨翠⑦、その子の大竹奥右衛門（知名）や、大町連の町人グループ、のちに上杉治憲藩政下において小千谷より縮師を招いた小出村の肝煎横沢忠兵衛の詠など、幅広い層から詩歌が勧進されている。さらには座頭二名の詠も収録されており、「霊前勧進詩歌」中の詞書にあるように貴賤や親疎を問わずに蒐集したものであることがわかる。

また中小松村の金子伝五右衛門、この人物は地方文人として知られる金子伝五郎（一七一六―一七九二）の縁者かと思われる。米沢文化圏の交流は、米沢城下のみならず近郊の文人層とも繋がりがあったことは、小関悠一郎氏によって指摘されている。小関氏によれば、宝暦・明和期の「漢詩文層の交流・結合関係は、菁莪社中・藩士文人―城下町人―（金子）伝五郎社中」⑧という構造をもっていたというが、この詩歌においてもその交流、もしくは構造が読み取れるのではなかろうか。その「伝五郎社中」と交流のあった大町の渡辺伊兵衛（清渓）の詠もこの詩歌には載っている。

最後に、この詩歌の伝来の経緯について触れておく。この詩歌は佐藤家で制作されたものであるが、現在は市立米沢図書館の木村家文書として収蔵されている。木村家文書は、昭和十年（一九三五）に寄贈されたものであるが⑨、佐藤家と木村家との関わりは不明である。木村家はこの詩歌にも勧進している木村丈八高広の家系である。

また製作者である佐藤直長（正芳・正香）は、元文五年（一七四〇）十二月に家督を継ぎ（二人半扶持五石）、宝暦元年（一七五一）五月には芋川縫殿殿の隠居に伴い一代限りで与板組へ召し入れられたが、明和七年（一七七〇）四月に病死した。その跡を継いだのが佐藤長兵衛正冨でこの「霊前勧進詩歌」においても佐藤新六直良として名が上がるその人物ではなかろうか⑩。

【図　美濃派俳人】



『米沢の俳諧』より

【書誌情報】

巻　数：　一巻（原本）

編　者：　佐藤長兵衛直長（正芳・正香）

成　立：　寛延三年（一七五〇）～明和三年（一七六六）

体　裁：　巻子

寸　法：　三一・六×三二七六cm

蔵書印：　「市立米沢図書館所蔵　木村家所蔵」印

【凡例】

一、本文はつとめて原文に沿うように翻刻を行った。

一、漢字は原則として常用漢字を使用し、それ以外は正字に改めた。

一、印章などは（印）と記した。

一、歌には各々番号を付した。

一、判読不明の場合、字数が推定できるものは□で表した。

この翻刻にあたり、米沢古文書研究会　前会長故山王堂初雄氏にご教授頂きました。山王堂氏は本年二月にご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

また解読に同会　会長の高橋敬一氏、高橋育子氏にもご教示頂きましたことをこの場をお借りして御礼申し上げます。

註

① 『米沢市史』第三巻近世編二（米沢市史編さん委員会、一九九三年）、七七五～七八一頁。

② 米沢市上杉博物館展示図録『上杉鷹山―改革への道―』（二〇〇四年）、五八～五九頁。

③ 前掲註①、五～十一頁。

④ 表では百三十九人の詠人を数えたが、「霊前勧進詩歌」巻末の記載は百三十五人と数が合わず、重複する人物が含まれているのか不詳。

⑤ 『上杉家御年譜』九、明和八年六月十六日。

⑥ 『米沢の俳諧』（米沢市史編集資料第四号、米沢市史編さん委員会、一九八一年）、八一～八三頁。また、同書所収の清水澄「資料からみた米沢の俳諧」、川村吉弥『わたり鳥―おいたまの俳人たち―』（一九六九年）に多くのご教示を頂いた。

⑦ 前掲註⑥『米沢の俳諧』、二三～二六頁。

⑧ 小関悠一郎『〈明君〉の近世』、吉川弘文館、二〇一二年、一一五～一三六頁。

⑨ 『市立米沢図書館所蔵　郷土関係寄贈・寄託文書目録』、市立米沢図書館、一九八三年、八七～九六頁。

⑩ 「勤書」（米沢市上杉博物館所蔵、上杉文書九八〇）

【表】「霊前勧進詩歌」の歌人一覧

『米沢市史』第三巻近世二　表 94 に加除訂正を行った。

	歌番号	付箋に記名されている氏名	号	名前	組/職/宗派	詩歌の種別
1	1-15,205	高津七郎兵衛緑之	平唯恒	七郎兵衛唯恒	与板組	和歌
2	16	（直政）	直政	（佐藤ヵ）直政		和歌
3	17,20,131	竹俣美作泰綱	泰之	美作当綱	侍組	和歌・漢詩
4	18	三俣九兵衛	吉年	九兵衛吉年	侍組	和歌
5	19	樋口茂右衛門	兼通	茂右衛門義通	五十騎組	和歌
6	21,27,28	関口六蔵	恭峰	六蔵満雅	馬廻組	和歌・漢詩
7	22,26	大石藤右衛門	綱寛	藤右衛門綱寛	五十騎組	和歌
8	23	桜井三助女	易之	父桜井三助義知	五十騎組	和歌
9	24	潟上孫四郎	高豊	孫四郎高豊	侍組	和歌
10	25	阿部五助	順正	五助順正	代官	和歌
11	29	金田伊右衛門	如舟	伊右衛門尚精	与板組	俳諧
12	30-31,90,204	岩瀬半兵衛義監	嵒涵養・涵養叟			漢詩・和歌・連句
13	32-34,92,206	佐藤長兵衛	梅軒野夫・佐藤直長	長兵衛直長（正芳・正香）	組外	漢詩・和歌・連句
14	35	佐藤新六直良	直良	長兵衛正冨	組外	漢詩
15	36-37	安江多久摩		光寛		和歌
16	38-39	江口縫殿右衛門	親寅	縫殿右衛門親寅	五十騎組	和歌・漢詩
17	40	江口藤五郎		藤悟郎政儔	五十騎組	漢詩
18	41	堀内兎毛	藤不盈	兎毛忠雄	与板組	漢詩
19	42	神保善弥（15歳）	神子善上	容助綱忠	五十騎組	漢詩
20	43	片倉半三郎	焉之	次右衛門佐満	与板組	俳諧
21	44	富井市右衛門	一羽	市右衛門秀寿	与板組	俳諧
22	45	石口宗七郎	其十	喜右衛門胤泰	馬廻組	俳諧
23	46	内田藤馬	一士	藤馬篤能	馬廻組	俳諧
24	47	樋口六郎次	東陽			俳諧
25	48-49	上松蔵之進	上松義局	蔵之進義局	侍組	漢詩
26	50	御二ノ丸正福院	米陽台下僧鳳山			漢詩
27	51	五十嵐伊惣右衛門	汝今	伊惣右衛門雁純	与板組	俳諧
28	52	新保宗馬	新保源秀綱	宗馬利綱	侍組	漢詩
29	53	色部松山	七十二翁月夕	典膳隆長	侍組	俳諧
30	54	浦井久次	其帆			俳諧
31	55	水無瀬波門	柳亀	波門命政	馬廻組	俳諧
32	56	本庄権左衛門	狐鶴堂	権右衛門長昭	侍組	俳諧
33	57	立岩郡太	梧洞	郡太次隆	与板組	俳諧
34	58	渡辺多七郎	慶邑	郷左衛門当久	五十騎組	俳諧
35	59	矢尾板代助	同遊軒一嶋薫盥	代助正休	与板組	俳諧
36	61－63	大狭與助	該斯	与助該斯	与板組	俳諧・和歌・漢詩
37	64	今清水市右衛門	義容	市右衛門義容	馬廻組	和歌
38	65	倉﨑七左衛門	一秀	七左衛門一秀	与板組	俳諧
39	66	倉﨑清五	廉州、素涼坊	清吾一信（清純）	与板組	俳諧
40	67	佐藤長左衛門	魯石	長左衛門	与板組	俳諧
41	68-69	徳間直九郎	徳間直九郎安喜			漢詩
42	70	高橋玄迪	満潤	玄迪満潤	藩医	和歌
43	71-72,207	小嶋三郎平幽夕	望山樓盈缶	小嶋三郎平居隆	組外	漢詩・俳諧
44	73-74	高津兵三郎	春花台髙明・平達恒		与板組	漢詩・和歌
45	75	藁科立意	源時雍	立沢	儒医	漢詩
46	76-80	山岸六助	有忠	六助方忠	馬廻組	和歌
47	81	芋川正令	半否	縫殿正令	侍組	俳諧
48	82-83	畠山通山	義知・松濤	左衛門義知	侍組	和歌・俳諧
49	84	畠山右京	義寛	主膳義寛	侍組	和歌
50	85-86,88,91,149,199	大行院莞山	蔦之・蔦胤		修験	和歌・連句・俳諧・漢詩
51	87,89	金田如舟				連句
52	93	片山紀兵衛	正固堂貞幹	紀兵衛一真	儒者	漢詩
53	94	片山代治	尚賓堂観光	紀兵衛一積	儒者	漢詩
54	95	平林蔵人正相	霞吹	蔵人　正相	侍組	俳諧
55	96	平林靭負	梅論	蔵人正村	侍組	俳諧
56	97	宝幢院勧乗房	玄慶		真言宗	漢詩
57	98	大行院覚円房	蘆童		修験	俳諧
58	99	横田三郎右衛門	吾舟	三郎右衛門光忠	五十騎組	俳諧
59	100	池田十郎右衛門	泰永	十郎右衛門信周	五十騎組	和歌
60	101-102	林源四郎	林政実	源四郎政実	五十騎組	漢詩・和歌
61	103-104	西蓮寺琢随	明阿	西蓮寺十一世	浄土宗	俳諧・和歌
62	105	内村玄登	伐柯	玄登値喬	藩医	俳諧
63	106	長町　清野四右衛門	法橋渭川			俳諧
64	107	黒江條助	求古	條助為元	藩医	俳諧
65	108	加藤市兵衛	老野夫藤卯生亮			漢詩

	歌番号	付箋に記名されている氏名	号	名前	組/職/宗派	詩歌の種別
66	109	新町　平吹治兵衛	其夕			俳諧
67	110	銅屋町　横井加右衛門	魚古			俳諧
68	111	勢州　田中彦右衛門	青波			俳諧
69	112	小出村　横沢忠兵衛	蘭舟			俳諧
70	113	添川村　小松兵六	北鳥			俳諧
71	114	中小松村　金子伝五右衛門	東野			俳諧
72	115	上小松村　佐藤仙次郎	季點			俳諧
73	116	上小松村　菊池嘉助	滴水			俳諧
74	117	中小松村　庄右衛門	柳曲			俳諧
75	118	片子　九兵衛	蠆石涯農夫碩松			俳諧
76	119	上和田村　渡部五郎右衛門	柳甫			俳諧
77	120	泉岡村　喜四郎	柳岡			俳諧
78	121	宮村　忠左衛門	東狂			俳諧
79	122	小出村　市郎右衛門	水山亭涼花	川崎市郎右衛門		俳諧
80	123	林高院	鉄心鈎我		曹洞宗	漢詩
81	124	吉見次右衛門妻	茂之			和歌
82	125	佐藤左内	等倫	左内信奥	与板組	俳諧
83	126	矢尾板衛士	矢白	衛士正賦	与板組	俳諧
84	127	安部清左衛門	虎陽	清左衛門	組外	俳諧
85	128	笹生彦五郎	鼓舟	彦五郎相秀	与板組	俳諧
86	129-130	安江弥九郎	安正武	弥九郎正武	馬廻組	漢詩・俳諧
87	132-135	板谷要人	知胤	藤九郎知胤	与板組	漢詩・俳諧
88	136-137	木村元三郎	花江・政儔	丈八高広	五十騎組	俳諧・和歌
89	138-139	栗原久右衛門	治冨	久右衛門春冨	御台所	和歌
90	140	棚橋才三郎	棚橋木斎	源右衛門正方	組外	漢詩
91	141,160-162,200	閑谷絶交	栄像・水星			和歌・連歌・俳諧
92	142	小森沢仁左衛門	柳席	仁右衛門起政	五十騎組	俳諧
93	143-144	小森沢仁左衛門妻	冨之			和歌
94	145-147	山田伝次右衛門芥舟	山田当広・坳堂芥舟	伝次右衛門当広	五十騎組	漢詩・和歌・俳諧
95	148,202	町田弥五四郎	臥月堂柳舟	弥五四郎秀衛	与板組	俳諧
96	150	松本舎人	寄英	舎人高当	与板組	俳諧
97	151	山下歓右衛門	旭瀑堂丹流			俳諧
98	152	町田常蔵	町田柳鳶	弥五四郎秀俊	与板組	俳諧
99	153	関原九右衛門	槐亭	九右衛門充長	大小姓	俳諧
100	154	新町　高橋久左衛門	信雅			俳諧
101	155	新町　鹿俣源左衛門	知夕			俳諧
102	156	小川与総太　勿堂	尚興	與総太尚興	五十騎組	漢詩
103	157-158	中條傳左衛門	中條庸軒忠宜			漢詩・和歌
104	159	長命寺閑居皆乗院	恵忍		浄土真宗	和歌
105	163	館山生蓮寺諦道	土恭		浄土宗	和歌
106	164	藤兵衛父隠居中澤一帆	六十九歳一帆	藤兵衛冒次	与板組	連句
107	165	川井村　慶福寺大恵	慶福寺欽文		曹洞宗	和歌
108	166	水野杏庵	春洲	杏庵元明	藩医	俳諧
109	167-168	藁科松伯	江松伯・凡鳥	松伯貞佑	藩医	漢詩・俳諧
110	169	猪俣松周	望涼庵泉隣	松英正愿	藩医	俳諧
111	170	小田切寒松軒	淵龍	弥捻随親	与板組	和歌・絵
112	171-172	小嶋内記	唇秋、無味吟	内記秀名	与板組	俳諧
113	173	大町　渡辺伊兵衛	維徳、清渓			漢詩
114	174	大町　渡辺利右衛門	度之純			漢詩
115	175	大町連　菅久兵衛	東以			俳諧
116	176	同　三原小太郎	東夕			俳諧
117	177	同　江口吉兵衛	宇橘			俳諧
118	178	同　舟山惣治妻（母か）まさ	女雨翠			俳諧
119	179	同　同人　子勘助	知名、可童	大竹奥右衛門		俳諧
120	180	同　12歳　三原庄左衛門	少年起月			俳諧
121	181	同　遠藤新助	芦舩			俳諧
122	182	同　加藤次右衛門	塩邑			俳諧
123	183	大町　小濱忠左衛門	一草庵四伯			俳諧
124	184	御免町　木田太兵衛	春鯉			俳諧
125	185	立町　木村六右衛門	保貫			和歌
126	186	法泉寺　戒堂	不責		臨済宗	漢詩
127	187	御二之丸老女　きし女	岸子			和歌
128	188-189	高橋平左衛門	牡丹窟紅二	平左衛門吉輔	馬廻組	祭詞・俳諧
129	190	自見庵	釈恵絽		曹洞宗	漢詩
130	191	松木利兵衛	松木源好寛	利兵衛好寛	馬廻組	俳諧
131	192	潟上舎人室	とり女	夫潟上孫四郎		和歌
132	193	沢根織江室	久米女			和歌
133	194	高橋玄迪娘　理世女	米之	父玄迪満濶		和歌
134	195	高橋玄益	高容	玄益満昆	藩医	漢詩
135	196	山田倉蔵	山玄庵			漢詩
136	197	座頭　艶都	盲人　桂角			俳諧
137	198	同　和歌一	可明			俳諧
138	201	町田　芦半	芦半			俳諧
139	203	禅透院　雷門	神龍山人海鱗謾		曹洞宗	漢詩

【解読】

春日詠十五首　　高津七郎兵衛緑之

和歌　　平唯恒

早春雪

1あまつ空春のひかりハ見えそめて
　またき霞にふれるあハゆき

名所鶯

2いろかえぬときはの山も鶯の
　谷よりいて、春をしらする

沢若菜

3いさけふハワかな摘にともろ人も
　沢辺の雪に跡つけてゆく

梅薫枕

4宵の間にひもやとくらんあかつきの
　まくらにかほる梅の春風

河春月

5はる霞たちこむるらし川の上に
　うつる影さへ朧夜の月

山花盛

6あし引の山にたとらんきのふけふ
　心にかゝるはなのしらくも

池上藤

7松枝にたよりて咲るむらさきの
　いろをもいけにうつす藤なみ

忍涙恋

8たまくに落るなみたをひろひをく
　袖にあまらハなにとこたえむ

祈身恋

9逢添るこゝろのおくもかハらしと
　はつせの神に身をいのるなり

契待恋

10烏羽玉の夜のころもハあけぬ間と
　ちきりしものをとりのなくらん

稀逢恋

11おもかけはわすれくさかや逢見ての
　こころハいかに言の葉もなし

旅泊夢

12梶まくらうきねさためぬ身の上を
　おもひ返してゆめも見るらん

田家路

13たとり来て田面の庵の奥迄も
　みちのありやと猶もたつねん

山家水

14柴の戸に山下水をせき入て
　こころもともに幾世すむらん

松積年

15春毎にみとりをそへて松か枝の
　としつもるらんかきりなきまて

此ひとまきハこころさし
ある人のとこにあらたに
なし奉りたる
あまみ津おん神をかけて
人〳〵まねくの聞えにより
よみてもてきたり
　寛延庚午歳二月廿五日

16大御稜威千年はかりの春なれと
　いまなほしろく匂ふ梅が香　　直政

早春　　竹俣美作泰綱

17千早振神代なからの春や来て
かすみ色そふ四方の山のは　泰之

三俣九兵衛

残雪

18ミねくの長閑に見へて雪ハまた
まハらに残る春の山陰　吉年

樋口茂右衛門

若菜

19わかなつむ野辺の小松を引ましへ
ひとつ二葉に千よの色そふ　兼通

竹俣美作

梅風

20春風に香をなつかしミ梅のはな
たか里よりそ匂ふなるらん　泰之

関口六蔵

帰雁

21さく花の匂ひ深きにかへる雁
なれし常世のミちのならひは　恭峰

大石藤右衛門

待花

22あし曳の山さくら花咲をまつ
心にかかる嶺の浮雲　綱寛

桜井三助女

春雨

23草の葉のめくみとなるや春雨の
ふれるかたより色増りけり　易之

潟上孫四郎

羇旅

24出るより幾日といふもしら河の
関路越ゆくたひの浦ふれ　高豊

安部五助

山家松

25世の中の芸をもわかて山の庵の
みさほに立し常盤木の松　順正

大石藤右衛門

祝言

26春の日の天ミつ影のみとり立
まつのちとせに栄ふミやしろ　綱寛

寛延三庚午年二月二十五日
神像之図舒軸之始、高津氏縁之入来、和歌
十五首獻案上、自謳之且縁之日屹与吟友
添二和歌十題一、合而可レ成二二十五首一、即時約関
口恭峯史士需レ之、史士卒配於二彼十題一吟輩
不レ日而成矣、仍記二于右乃奉納一軸一自是始、

関口六蔵

天満神の祭とり行ひける人の
もとにて申侍る

27天みちる神の恵の香をとめて
幾春匂ふやとの梅かえ　恭峰

同人

（印）

佐藤氏頃使二画工一模二写於
北野聖像一装潢甫就焉、今茲庚午
仲春二十五日会諸賢賦二詩歌一、
以擬二奠儀一、余亦列席末敬二詠松
梅一献呈之伏祷二　主人景福二云、

28鬱蒼貞操閲千古幽艶清
容絶点塵梅是其文松是
質仰高文質共彬々

関口恭峰拝上
（印）（印）

金田伊右衛門

奉納

29梅枝や紅ひとほす神の前　如舟□

岩瀬半兵衛義監

神祠梅

30二月令辰系啻常梅梢向
霄悉春光横斜疎影映
神鑑氷蕊雪葩和徳香

31いにしよりちかひの道は
とをからす　けふ神垣に
にほふ梅かえ

嵒涵養再拝
（印）

佐藤長兵衛
（印）

今茲寛延三年庚午之春、憑二画
工一新奉レ模二写於
天満神尊容一、乃是家嫡直良敬
奉之至誠也、維時二月廿五日
洒掃茅屋而始設二典儀一、恭思二
往日之垂迹一、普天卒土讃仰
豈有レ他乎、幸今早迎春陽之
淑気、松梅増二青紅一、伏冀僕輩
亦慕二社頭松梅之操一、質欲浴二雨
露之恩沢一、仍裁二野誌一絶一欽奉
献之、復諸秀才和漢之咏章
充二　聖壇一、噫嘻何意二徳風一忽
至于此矣、感嘆不レ止、仍憶重而
謁一文雅之客一、益可レ乞二一句之詠
藻一、于レ倭于レ漢随レ志所之為二一軸一
以欲レ供一神鑑一、是僕所希而已、

32徳化仰高二月天
和光聖影遍儼然
松花梅蘂向栄日
恩露惠風新緑鮮
梅軒野夫
佐藤直長再拝
（印）（印）

神威を仰き奉りて
直長

33神垣の梅の匂ひは春風に
薫りそつたふ四方の国々
広前にやまとことの葉やから
哥を捧けて其数くの
いみしきこそ
神のめくミの至れる事と
いとかたしけなさに

34年毎に大和唐しことの葉の
筆の林に華やしけらむ

佐藤新六直良
（印）

庚午春二月廿五日拝
菅神此日
慈父招諸賢亭上請詩賦歌
詠忽以為篇小子謾作一律
付巻末不肖為諸賢書之偏
奉膝下以志而已

35二月艶陽天奠儀開雅
筵主人供野艸座客染
華箋不厭趨庭労歓聞
白雪篇闕黨非益者空
耻富青年

直良拝書
（印）

右祭席献備如レ是、爾後奉納之吟咏、任二落掌一
不レ為二高下序次一戴之、古人云、遥見人家花便
入不レ論二貴賤与親疎一、余亦聊慣其謂而已歟、

安江多久摩
佐藤氏の求めにまかせて聖像を悪なる
筆に模し奉りて

36写しおく神の御影ハまことある
ひとの心を請て守らん　　光寛

社頭梅

37はることにますいろ見せて神垣の

松に幾世をちきる梅かへ　光寛

江口縫殿右衛門

佐藤氏

北野の霊像を安置し奉り
まつ梅を供するのよ
ろこひを聞侍りて

親寅上

38千代かけてそのかミ
かきのまつ梅を ぬさ
とりあへぬためしと
もみむ

奉粛拝
菅神霊像

39筆工描来北野
神五名十号出
煙塵煥哉今古
文章冨東海独
香梅主人

江口藤五郎

謹捧
菅廟

40一莫賢明主長憐
聖智臣古宮高瑞
気上苑在芳辰文

事千年化梅花二
月春春光都拠旧
徳沢況還新

木村観上

祭
菅君廟

堀内兎毛

41二月新林瑞気開春
凰一片画墻梅文華
千歳尚如旧階下幾
人引御杯

右　藤不盈上

神保善弥十五歳

42苑上瑞雲起
晨登天満宮
梅花今日発
猶似昔時紅

神子善上

43御社に咲やこの花星の文　焉之

片倉半三郎

天満宮奉納

富井市右衛門

44照にしけふや梅の恵も筑紫まて　一羽

45白梅の御前振ふしけり哉　其十

石口宗七郎

46よ所ならぬ梅の匂ひや神の庭　一士拝上

内田藤馬

47其徳の松に明るしむめの花　東陽拝上

樋口六郎次

拝謁
菅神宮

上松蔵之進

48春暉相映画詹重筑紫
飛梅北野松積翠閲年
呈勁節清香依旧占霊
蹤四眖徳化
神如在千歳遺風人竭
恭回首林間多夕照報
来殷々寺楼鐘

上松義局再拝

49昔日依
神詠茲移華洛春東凰
吹不尽香気到今新

社頭梅

上松義局拝上

（印）　　御二ノ丸正福院

梅

50瑞靄祥霞北野春
温光依旧見清新
一枝氷蕚
神霊徳千古伝芳
感激人

右　米陽台下僧鳳山拝
（印）（印）

五十嵐伊惣右衛門

51香をきけは都も近し梅の花　汝令拝

新保宗馬

社頭梅

52二月廟前紅白梅
春風今日復新開
年々歳々還如此
偏憶当時作賦寸（オカ）

新保源秀綱

拝上

色部松山

奉納

53笠ぬきて
清めの垢離や
梅の雨

七十二翁　月夕机

浦井久次

54うつ高し梅のつわひのふとるにも　其帆

水無瀬波門

55青梅もめくミの数や我ら迄　柳亀

本庄権左衛門

奉納

56松見れハ眼も青く霞哉　狐鶴堂　以上

立岩郡太

57松梅は老ても若し神の庭　梧洞拝

渡辺多七郎

58千歳の芽は今出るか若みとり　慶邑拝

矢尾板代助

59御社の梅は異なる薫り哉

同遊軒　一嶋薫盥

大峡与助

天神奉納詩歌幷発句

60鐘ひゝく花やちらく観音寺
61天満る月のミかけや神酒　陶
62神の名のあらん限りハ梅かゝも
いく世つきせぬ春に栄ん
63巍々霊社一菅神
風月英才今古均
三百里外梅抄薫
晩鐘寂寞想郷春

右　該斯再拝

今清水市右衛門

社頭松

64千とせふる老木の松も天神の
宮井そはやく若ミとりたつ　義容

倉﨑七左衛門

65旅痩の顔も美し梅の花　一秀

倉﨑清五

66風流の住連（注カ）や老木の松に藤

廉洲九拝

佐藤長左衛門

67照星にゆびさす梅の楮哉　魯石

徳間直九郎

奉拝

菅廟之祭

68北野陵宮菅古廟鳳飛玉樹
紫雲懸画牆日映龍蛇動丹
壁風愃鳧鴈連嵐嶺晴光梅
若雪鴨河佳気柳含烟興来
新拝朱簾裡
聖像巍々対舜天
又
69千古菅陵玉殿開鶯花
燎乱社頭梅宮人打捨錦
羅帳
徳此偏如日照来
徳間直九郎安喜

70咲初むる匂ひを道のしるへにて
千代のかけそふ宿の梅か枝　満闊
高橋玄迪

71梅映一千年後雪松含八百歳前風
和光碎影遍都鄙文雅扶桑第一
宮
72梅か香やいる五十とせの舳ならめ
望山楼　盈缶九扒
小嶋三郎平幽夕

春日佐藤氏亭上
聖廟之祭祀備野詩
高津兵三郎

73二月芳筵会奠儀雅調新
松含千歳色梅迎旧時春
忠烈垂今古徳光現鬼神
精誠崇祀処長照後生人
春花台　高亮明拝稿
（印）

佐藤氏の亭
聖廟の像によみて
たてまつる和歌
高津兵三郎

74あまつ神めくみを深く
しき嶋の　たゑぬなかれを
幾代くむらむ
平達恒拝上

菅公社
75北野之廟侍臣衣昔
日晃旒下紫微関上
乃今春雁去正過鳳
闕幾回飛
右巴歌　源時雍再拝
藁科立意

76咲枝のかそふる斗すくなきも
おほかるころにまさる初花　有忠
苗代蛙
77しめはへて幾日なるらし苗代の
小田の蛙のこゑたえつなく　有忠

夏露
78朝またきミれは涼しきなつ草の
みとり色そふ露のしらたま 有忠
観月
79久かたの空もくまなき秋の夜の
さやけき月にむかふたのしさ　有忠

林葉紅
80幾時雨染てやかゝるくれないの
あきの林の色をみすらむ　有忠
芋川正令

初花
山岸六助

81松か枝の幣は我家の祈り哉　半否上
畠山通山

天神奉捧
82神かきや梅の香ひも松の葉も
なをきみとりの道を守らん　義知

天神奉捧　同人

83松梅は文武二道の姿かな　松濤

天神奉備　畠山右京

84松梅のやしろハ誰もをのつから
いはつもしるき明の玉かき　義寛

大行院莞山

きさらきすえの五日
佐藤氏のいゑにたふとミまつる
天満宮のまつりにまいりて社頭の
松梅を題にしてよみてささけたる
うたあるを見つゝうらやミてよめる　篤之

85もとよりもためし久しき神かきに
松かえしける春のさかへハ

86ちはやふる神のめくミやかほるらん
けふ咲そむるたまかきのむめ　四人即興

奉納
賞梅漢和聯句　表六

87吐レ香ヲ梅ノ唱ー句　金田如舟

88筧をこやす雪解（トケ）の音　大行院莞山

89はれのこる霞に山も寛て　如舟

90 譙（サカモリハ）桃ー嫌ノ侭ニ斟ハ　岩瀬涵養

91 舞ー兮（タリ）騒（カス）二月ー見（ヲ）一　莞山

92 秋出替りも色〳〵の禽（トリ）　佐藤梅軒

下略

宝暦三戦二月廿五日　各拝上

片山紀兵衛

（印）

謹賦于松間梅奉納
天満宮

93霊神遺愛古今彰
交葉接枝樹樹芳
松若翠簾梅若玉
紅暾相映曝天章

正固堂貞幹再拝
（印）

恭題于松間梅
奉納
天満宮

94神聖経営万古基
縦横曳曳五雲奇
梅花雅操松之幹

維徳馨兮百世師　尚賓堂観光再拝
（印）（印）

95麦秋やわけ行人の外清浄　霞吹　平林蔵人正相

96御手洗の彩色足れりことし竹　梅論拝　平林靭負

宝幢院勧乗房

奉納

97躑躅蟠桃擁翠巒
薫風嫋々入欄干
個中自有神霊在
不許人間仔細看

丙子初夏　玄慶再拝

大行院　覚円房

奉納

98森ふかき千木を目当の雲雀かな　盧童

横田三郎右衛門

奉納

99涼しさや胸に箒を神の庭　吾舟拝

池田十郎右衛門

100 幾ちよもけふ天神の祭りとて
松に色はへ咲る梅かえ　恭永

林源四郎

（印）
社頭梅松

101 社頭春色転分明
馥郁梅風松亦清
葉々枝々遺愛処
黄鸝続得古鈴声

102 神垣にかつ咲にけり梅の花
栄ふる枝の千代をふるまて

林政実再拝
（印）（印）

西蓮寺琢随

奉納

103 燕も百度参り歟宮めくり　明阿

社頭花

104 神垣や宮もる袖に香をとめて
いくよの春か花ハさくらむ　明阿

内村玄登

佐藤氏の需に応して

105 丹誠ににほふや神の梅木立　伐柯

長町　清野四右衛門

106 そことなくかすめる園の梅のはな
さかりしられて匂ふはる風

法橋渭川

黒江條助

奉納

107 捨てたまハし革を幣の二葉をも　求古

加藤市兵衛

適応芳霧噴一絶以恭

奉献備

菅神奠辰之霊案下伏

仰景祥

108 千歳文花三月林
各傾葵是発於襟
仰観映日神台上
紅翠両香無古今

老野夫藤卯生亮米拝上

新町　平吹治兵衛

109 和らかな風の姿や松木立　其夕拝

銅屋町　横井加右衛門

110 神垣は木枯もなし琴の音　原古

勢州　田中彦右衛門

111 宮守も歌よミたかる桜哉　青波拝

小出村　横沢忠兵衛

112 注連縄の一ト穂出の香や梅の花

蘭舟

添川村　小松兵六

113 松に梅とちらか兄そ神の庭　北鳥拝

中小松村　金子伝五右衛門

奉納

114 咲初るさくらの粮や森の注連　東野

上小松村　佐藤仙次郎

115 参詣の袖も布引桜かな　李点

上小松村　菊地嘉助

116 神を祭る爰もから井の桜かな　滴水

中小松村　庄右衛門

117 佐保姫の俤ふかし神の森　柳曲拝

片子　九兵衛

118 梅の香や廿五日の朝清め
墓石蛙農夫　碩松拝

ひととせ北野の霊廟へ詣てし千度廻りの

子共を見侍りし候事を存出て
上和田村　渡部五郎右衛門
119 玉垣に千度詣やかさ車　柳甫

泉岡村　喜四郎
120 神垣に蝶の涌たつ日和かな　柳岡

宮村　忠左衛門
121 松に雪朱の華表の其あたり　東狂

小出村　市郎右衛門
奉納
122 そのまゝの幣にや梅の薫る時　水山亭　涼花拝

林高院
契天満宮
123 神人垂迹洛陽
北千梅霊松一
夜生奪得経山
無字即支那桑
国震英名

鉄心鈎我書
（印）（印）

吉見次右衛門妻
124 天地のむかしも今も誓あれは

なを末長くしけれかみかき　茂之上

佐藤左内
125 神籬やいつき
かしつきはなの兄　等倫拝呈

矢尾板衛士
126 常磐木の宮になお照れ梅の花　矢白

安部清左衛門
127 春風や松の青ミの聞所　虎陽

笹生彦五郎
奉納
128 繙くや神躰の俗花の兄　鼓舟拝

安江弥九郎
奉献
天満宮於梅子
129 暗香浮動満人家
江北江南多愛花
豈耻社頭献其実
塩梅固是自横斜

竹俣泰綱拝上
句
130 愛相の仮令てハなし神の梅　安　正武拝上

竹俣美作
社頭梅
131 洛陽春色日相催
北野風光避世埃
千歳清香千歳操
至今不変社頭梅

板谷要人
天満祠二詠并和歌
社頭梅
知胤
132 春風初発一株花
花発社頭帯早霞
二十四番高志気
品題更被賞名家

133 玉垣のひかりやわらく梅の花
かすみふかめてにほふ成らん

松緑久
134 重翠鬱蒼宮社前
古根蟠蜿幾千年
任他酔被傍人咲
乗興漫成松寿篇

135 幾万代までも栄ふ神垣に

まつはみとりの色をふかめむ

奉納　　木村元三郎

花江百拝

136梅かいも
七尺さつて
いさきかん

右同人

聖像を
初て写し
奉り給ふ
よろこひを
聞て

137神風に匂をおこせ松梅の
みとりも花も千代をかさねて　政儔

松添栄色　　栗原久右衛門

138年経ぬる岡辺の松も春来ては
千代のけしきにミとり立添ふ　治冨

社頭梅

139神かきや恵もふかき梅か香を
袖にうつしてかへるもろ人　治冨

（印）　　棚橋才三郎

仲春之日　梅軒俊才使二画工一
新模二写於
天満宮霊像一焉、正為二国家一恭祈二景
福一可レ謂二能事一神者也、憶夫予曽
敬奉レ之矣、故喜レ之也、深信レ之也、
厚矣、且目前会二文雅之騒友一於レ
華亭、而各賦二唐詩一詠二倭歌一以為レ
軸矣、又続レ之以欲レ教二卑語一附二巻
尾一焉、素交二有年一友誼、尤篤不レ耐二
感謝一、乃裁二一絶一謹奉二供
霊鑑一焉、所謂画鵠不レ成類鶩者也、

140模得素箋画工成儼然聖影仰
文明徳風維馥梅花下須映霊
光耀至誠

棚橋木齊拝
（印）（印）

141天満る梅の匂ひをはるかせの
伝へて広きしき嶋の道　関谷絶交　栄儀

奉納　柳席　小森沢仁左衛門同妻

142紅梅もぬさと申さはにしき哉

梅　富之

143咲初て風ものとかに梅か香を
かゆる軒端に吹そつとふる

松　同

144みとり立木梢もふかき若松の
幾世さかふる末そ久しき

山田傳次右衛門芥舟

145北野聖霊煥有章
花晨望拝祷禎祥
若論不測威神力
一樹於今伝暗香

山田当広拝上

待花　同人

146神垣にめくめる花の朝なく
咲そむるやと待かねそする　当広上

147梅の其隣の松も匂ひけり　均堂　芥舟　同人

148信仰の冑をひらくや宿の梅　窆令齊　柳舟　町田弥五四郎

大行院蔦胤

奉納

149 梅いく世ことはの花の兄御前　観山

松本舎人

150 花鳥に衣紋まかせつ神の松　寄英

山下歓右衛門

151 幕にして松を敬ふかすミかな

旭瀑堂　丹流

町田常蔵

152 陰陽の気情上らへや松と梅　町田柳鵞拝

関原九右衛門

153 朝なく算へし梅の莟かな　槐亭

新町　高橋久左衛門

154 うくひすやことしは竹も附益て見へ　信雅

新町　鹿俣源左衛門

155 千代ぞむべ替らぬ宮の松の色　知夕恐拝

小川与総太　勿堂

庚午二月

梅軒主人亭上作

156 清香浮綺席

美酒満芳杯

坐集東山藻

奥供北野梅

尚興拝稿

（印）（印）

中條伝左衛門

（印）

佐藤某嘗摹

天満宮之　尊容敬奉之矣且覔

予詩歌乃謾賦謹備

神鑑

157 鑽仰威稜設写

眞黙思応験古今新

徳華炯々高如許光

被普天卒土濱

158 神風の恵そふかき

梅の花　かはらぬいろは

千世をへぬへし

寛延第三庚午之歳孟秋之日

中條庸軒忠宣謹書

（印）（印）（印）

長命寺閑居　皆乗院

天満大自在天神の御像を

写し奉りて崇ミける人の

もとへ読て遣し侍る

恵忍

159 仰くとも限り

あらしな久かたの

天にミちたる

神のめくみは

関谷絶交

奉納　水星

連歌三拘

160 神もたつや老木の若ミとり

161 白ゆふかかる梅の夕栄

162 鶯のやとハと問は軒ふりて

館山　生蓮寺諦道

出生豊前小倉住

七十二才　生蓮住土器

千代もかわらぬ

163 我頼む　雲井に人を　土器

まつかさき

誓なりけり

藤兵衛父隠居　中澤一帆

ここに佐藤氏何某天満宮を仰き奉ること他にこと成といわんや、且神慮をいさめ申さん寸志のミか言の葉のよしあしるもしらぬも書集備ふる社誠に大自在天満宮のみこゝろにもかなわん事よ、と彼の神恩に老

ほれいにしへ京にありしとき請しはつ春の、
北野の御粧ひおもひ出られ、御やしろに笠
をぬきたるここちして、尊号の六もしを上
にし佐藤の性名を下につらね、御寵愛の梅
松を先とし、六句を綴りさゝく

164 大　ふとつたり　佐　くや此梅松のはな
自　おのつから也　藤　のかけ棚
在　ありあまれ　氏ッ　人ぞめく初湯立
天　天も酔らん　長　宴の三き
満　みつる世の　兵　ハ北野のかさりもの
宮　宮司さかれハ　衛　士もうるわふ

寛延四辛未正月二十五日
六十九歳　一帆居士（印）
川井村慶福寺大恵

165 移しをく神の恵にまつむめの
みとり栄えて幾世かほらむ　慶福寺欣也
水野杏庵

166 花なりとしれと尊し神の梅　春紗
藁科松伯

167 今日古祠上聖明遙瞻望
千年長後凋松竹多清響
（印）
小嶋内記

右
菅公祠
江松伯再拝
（印）（印）
右同人

神霊のあら
たかなるを千
歳の下に渇仰
し奉

168 梅咲やむかしもやはり此にほい
凡鳥拝上
猪俣松周

169 鶯も仰く色音や神の梅　望涼庵 泉隣
小田切寒松軒

170 松梅のすかた
はかりハゑかけ
とも色香は筆に
およハさりけり
（印）

宝暦十庚辰年九月廿五日
米県隠者淵龍自画自賛行年
及七十一歳模写（印）（印）

171 霞からゆたかに松の朝日かな　唇秋
右同人

172 梅も此夕日を得てそおほろ月　唇秋
大町　渡辺伊兵衛

173 辺城春色旧来遅積
雪猶残二月時惟見
菅神祠上樹梅花似
錦柳如糸
右一章奉左氏園
中斫立
菅神祠　階下辺
渡辺維徳拝稿
（印）（印）

上献聖廟
大町　渡辺利右衛門
（印）

174 誰謂非伊呂巍
然天満宮先朝
分列位後世仰
成功松樹千秋
緑梅花万古紅
神威今赫々鎮
坐洛陽中

右　度之純九拝
（印）（印）

大町連　菅久兵衛

175 その色にちとせは□し若みとり　東以

同　三原小太郎

176 おのつから　□□も花や神の庭　東夕拝上

同　江口吉兵衛

177 うつかりと今宵も更て朧月　宇隣

同　舟山惣治妻まさ

178 日おもてにゆび折ほしや梅の花　女雨翠

同　同人子勘助

179 鳥居から其奥ふかし松の藤　知名

同　三原庄左衛門　十二歳

180 御手洗を結ハんそこの柳かけ　少年　起月

同　遠藤新助

181 いろくの草の種まく野分かな　芦舩

同　加藤次右衛門

182 鶯や尊ふとさも先其音より　塩邑拝

大町　小浜忠左衛門

奉納

183 恐レ有匂ひや梅の咲所　一筆庵　沙泊拝上

御免町　木田太兵衛

184 神にそたつ梅や心の朝清め　春鯉

立町　木村六右衛門

185 神かきやいく代のみとり数そえて
さかゆく松にかゝるしらゆふ　保貫拝上

法泉寺　戒堂

（印）

186 二月東風吹雪来
菅神祠上積成雖
野霜玉梅玲瓏色
勝北洛陽城北梅
右一章奉廟前

不責

（印）（印）

御二之丸老女　きし女

栽梅待鶯

187 我園に手つから梅をうつし植て
かねてまたるゝ鶯のこゑ　岸子

高橋平左衛門

祭詞

188 月と花との道さまくに
御影あふかぬ家もならし
我もめくミの春にひかれて
筆の林に百の囀り
右　紅翁拝上

右同人

和光同塵は結縁のはしめ

189 うくひすの笠もとかめす神の花
ほたむ窟　紅二敬白

自見庵

奉
菅公祠

（印）

190 三春梅発響鶯声
千歳松深掛目明
請見　菅神祠上
色何人不耐写閑
情

釈恵紹

（印）（印）

松木利兵衛

191 この花や匂ひも爰に神心　松木源好寛

八十五翁拝上

潟上舎人室

社頭梅

192 立ならふ松にならひて宮しろの
むめもちとせの春やへぬらん　とり女

沢根織江室

梅香

193 神かきの老木の梅そ咲にける
つきぬ色香は千代をふるとも　久米女

高橋玄迪娘理世女

194 あま神の恵をうけて幾千代も
みとりさかへん宿の松枝　栄之上

高橋玄益

（印）

195 白鶴城頭済気催
翻々黄鳥好音来
菅公祠上梅花色
猶帯春光爛漫開

右題

菅公祠　高容拝稿

（印）（印）

山田倉蔵

196 菅公祠上好相尋今日
風光遺愛深不責梅
花開寄絶龍松猶心
旧時吟

右

菅公祠　山玄侯拝稿

197 雪ふれど転ハぬ杖や曽根の松　盲人桂角

座頭　艶都

同　和歌一

198 梅咲や神の自愛を人とても　可明

大行院莞山

（印）

199 丁丑二月二十五日列
佐藤氏之祭筵粛拝
天満宮　蔦胤
神聖文章四海中古今流
徳遍和風遺光妍日合明
処松自新青梅自紅

（印）（印）

200 集りて爰へきたのかもゝ千鳥　関谷絶交

水星

町田芦半

（印）

佐藤氏奉納の
一軸成就を賀して
申おくり侍る

201 神垣や紐とく〳〵と
玉はせを
丑六月廿五日

八十二齢

芦半書

（印）（印）

町田弥五四郎

202 莟たりひらいたり青物の梅　臥月堂　柳舟拝

禅透院雷門

（印）

佐藤氏直長賢士数年以来　天満宮
奉二納諸英士之詩歌一、今纂二為レ一軸装
潢一盛レ筐鎮レ家也、此日借二送山僧一被二許
覧一
詩也、歌也、如レ華似レ錦、皆是出二従賢士
赤誠一者乎、随喜之余謾口占、拙偈
以レ寓二其初一者伸軸底美、其次者祝二
家道悠久一尓云、

203 団圞一軸価千金載得羽
城騒雅唫錦蔟々兮華蔟

蔟玩将使我飽美心
画像神兼一軸章世家永
鎮掲聯芳赤誠自有瑞祥
在擁護児孫武運昌

居諸　神龍山人海鱗謾稿
（印）（印）

梅軒雅契嘗帰二敬
天満宮一図画二　神影一安
于屋漏常日崇奉輸誠
毎年二月二十五日祭
辰行潦采花甚厚異且
乞許多友人之詞章欲
献之、漸至去歳丙子之
冬所纂二詩歌二百餘篇一
也、殊達二
二台君一高聴拝賜二
玉句一花箋是乃非二唯
恩光偏誠
神感相応一者乎、雅契太
悦於レ是将乞二余一絶一記、
其事於巻尾末固旧盟
豈忍固辞漫書鄙言随
喜以応二其需一云、

岩瀬半兵衛

204 松穆梅昭徳化敦文章満案
換蘋蘩寸衷千里　神攸饗
慶祝家栄伝後昆

行年六十九
涵養溲謹跋
（印）（印）

高津七郎兵衛

依レ進レ詠副二巻軸一和歌
唯恒敬上

205 まことあるこゝろそ
たねともろこしややま
とことの葉もゝのし
けりは

佐藤長兵衛
（印）
方今献二章為レ一軸一予畜念二
祈願満一于レ茲仍漫書俚
語以為レ跋矣

不改同字及平仄

206 曽摸二聖影一既七歳、丹青揮毫徳輝新
台上鳳文掌中落、欣々俯仰拝此醇二
宰府霊梅一其実一頒得二徳香一、当万鈎
北野群英連芳百寄来東偏成二奇珍一、
高氏詠題十五首自レ是貴賤好句陳二
和漢二百有余藻一、米陽競レ華百餘人、
盥嗽自綴、今作レ軸丑年幸丁聖誕辰
時哉時哉、豈不レ悦厳粛整斉供二霊神一、
承和二丑年　神降誕今当其霊辰
仍句中及レ茲
宝暦七丁丑年二月二十五莫

佐藤直長欽書
（印）（印）

小嶋三郎平居隆

易曰誠物之終始也、佐藤英士従夙歳奉
尊敬、

207 自在天神誠敬之餘乞於一郷之緇素而求二
於詩歌一、滑稽玉藻既数百首随於著到之、
魁殿為二管城之列一無射石移レ山之志、則豈
能
成二一軸一光武曰有志者、事竟成焉、宝暦
七年
二月二十有五日、望山楼盈缶跋
（印）
従二寛延三庚午稔一経二七歳一、而手自
綴之為二一軸一、又有二追加一凡尽深志
于レ茲十七ヶ年明和三丙戌季漸
装潢成就焉、
詠数二百七章
和歌七十一　詩四十三　誹諧八十三
俳連六句　聯歌三ツ物　和謌一首
文一章
吟輩百三十五人

諸士八十二人　女八人　僧十二人
町家十九人　郷村十二人　盲二人

郭陰梅軒野夫
佐藤長兵衛正芳
（印）（印）